



Title	UnamunoとRubén Darío
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1968, 1, p. 64-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93560
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Unamuno と Rubén Darío

吉 田 秀 太 郎

Juan Ramón Jiménez は、かつて Unamuno と Darío を評してこういった。Unamuno も Darío も共にイスパニアの詩における Bécquer の偉大な後継者であり、一方が「内的な」革命家であるのに対して、他方は「外的な」革命をもたらした。(Espíritu de la forma y ansia sin forma, doble becquerianismo, mezcla paradójica en lo superficial, homogénea en lo interno)^①

Unamuno はイスパニアの文学に思想的な厚みを与え、Darío は、詩に新しい形を与えた。98年代の作家たちと近代主義者との文学に対する態度は異っていたが、両者の激しい切嗟琢磨によって、イスパニアの文学は、17世紀以来絶えてなかった黄金時代を迎えたのである。この2人の詩人の交渉と足跡をたどりつつ、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイスパニアおよびイスマノアメリカの文学史的一断面を窺おうとするのが本稿の目的である。と同時に、特に、Unamuno と Darío との個人的な関係において、両者を隔てていたものが、果して、これまでいわれているように文学上の主義、主張の相異のみによるものかどうかとも検討してみたい。

× × ×

1916年2月6日、Rubén Darío は故国ニカラグアの Managua で世を去った。50才に満たない、短い生涯だった。同年5月10日付の La Nación 紙に、Darío に関する回想風な記事がのった。筆者は Unamuno で、末尾に、「Salamanca にて、1916年2月」と記されていることから、詩人の訃報に接して間もなく書いたものであることがわかる。この新聞は、アルゼンチンは Buenos Aires で発行されている名の通った新聞で、Unamuno と La Nación 紙とのつながりは、Darío に負うものであった。1899年、Darío が同紙の通信員兼代表者として Madrid へやってきたとき Unamuno に協力を呼びかけたのだった。Unamuno は Darío の死後も寄稿をつづけ、結局、1935年、つまり彼の死の1年前まで続いた。

さて、先述の Unamuno の記事は『ルーベン・ダリオとの文通』(De

la correspondencia de Rubén Darío) と題するものであるが、その中で、彼は **Darío** との交友関係について興味深い事実を明らかにしている。とりわけ、次のような告白は **Unamuno** の心の卒直さを示したものとして注目に価する。

Siempre entre los dos, entre él y yo, hubo como una cristalina muralla de hierro.^②

すなわち、2人の間には目に見えない鉄の壁があって、互に肝胆相照らすことを妨げていた。しかも、**Unamuno** によれば、2人とも、進んでこれを取り除こうとはしなかったのである。このような状態は、**Darío** が世を去るまで続いた。この2人の心のわだかまりの真相に立入る前に、**Darío** とイスパニアとの関係、そして次に、**Unamuno** との出会いについて述べてみたい。

Darío は少年の頃から、中米の国々を皮切りに、南米、ヨーロッパ、北米と、世界の各地を転々としたが、イスパニアには、前後8回にわたって立寄っている。彼の良き伴侶だった **Francisca Sánchez** はイスパニアで知り合った女性である。はじめてこの国を訪れたのは1892年のことである。そのとき彼は **Colón** のアメリカ大陸発見400年祭に、祖国ニカラグアの代表として式典に出席した。これまで、イスパニアの詩人たちと作品でしか接し得なかった **Darío** は、直接、彼らに接する機会を得た。**Santander** 港から **Madrid** に着いた **Darío** は **Menéndez y Pelayo** の投宿している同じホテルに到着し、心はずませるが、生憎、彼は自宅のある **Santander** に帰った留守で会えなかった。しかし、2人は親しく交わることになる。**Menéndez y Pelayo** は **Darío** の詩才を高く評価し、例の著書、*Antología de poesías hispanoamericanas* では、**Darío** のために多くのページをさいている。詩集『青』(*Azul...*)に序文を書いてくれた **Juan Valera** とはじめて会ったのも、この年のことである。彼の紹介で **Darío** は **Madrid** 在住の文化人たちを知る機会を得た。その中にはイスパニアにおける近代派の先駆者、詩人 **Salvador Rueda** もいた。この **Andalucía** の若き詩人のために、**Darío** は彼 (**Salvador Rueda**) の詩集『犇き』(*En tropel*) の巻頭に『柱廊玄関』(*El pórtico*) と題する詩を捧げた。これは **Galicia** 地方の民謡に見られる、いわゆる *gaita gallega* という詩の形式で書かれたもので、**Darío** にとって初めての試みだった。今日、**Darío** の詩集『流

浪のうた』 (*Canto errante*) の一部をなしている詩、『コロンブスに』 (*A Colón*) も、この年の作品であることが確認されている。^③ この他、詩集『俗なる続唱』 (*Prosas profanas*) を飾る詩『紋章』 (*El blasón*) や『そよけき風なりけり』 (*Era un aire suave*) など、Darío の最初のイスパニア訪問の年に作られた。

2度目にイスパニアを訪れたのは1899年のことである。イスパニアは当時、米西戦争に敗れ、国民は疲弊し切っていた。Madrid 市は直接敵の攻撃を受けたわけではなかったから、街のただずまいには以前と変わりはなかったが、住民の貧しさは覆うべくもなかった。^④ Darío はこの戦後のイスパニアの姿を *La Nación* 紙に報道する目的でやってきた。それはやがて、1901年、『現代のイスパニア』 (*España contemporánea*) という題で、単行本として出されることになる。今度の訪西で Darío はイスパニアの各地を旅行し、いろいろな階層の人々と語り、種々の催しに参加して、当時のイスパニアの姿を生き生きと描き出した。Unamuno の言によれば、その描写は万華鏡的シネマである。^⑤ (*Es un cinematógrafo algo caleidoscópico, en que desfilan dramaturgos, poetas, novelistas, libreros, editores, académicos, políticos, pueblo en general... (中略) visto desde Madrid.*)

約1カ年のイスパニア滞在中、Darío は多くの詩人や作家たちに接した。特に Valle-Inclán, Francisco Villaespesa, Juan Ramón Jiménez, G. Martínez Sierra, Jacinto Benavente など、イスパニアの近代派詩人たちと親交を結んだ。その頃の Unamuno は、いわゆる「98年代の作家たち」の指導者的立場にあり、『純正主義をめぐって』 (*En torno al casticismo*) と題するエッセイのあと、『戦争の中の平和』 (*Paz en la guerra*) を公けにして、独創的な思想と強烈な個性の持ち主であるとの印象を与えていた。Unamuno と Darío が知り合ったのはこの頃のことである。1892年にイスパニアにきた時は、Unamuno は Salamanca 大学のギリシア語学文学担当教授としての第2年目を迎えたばかりであり、また長男も生まれるといった風で、公私共に多忙だったので、ほとんど Salamanca から外に出ることがなかった。はじめて Unamuno に会った時の印象を Darío はこんな風に述べている。「私はその頃、Joaquín Dicenta や Valle-Inclán と一しょに、よく Madrid のバーや喫茶店を飲み歩いていた。そんなある日、

『珍しい人を紹介しよう。奇抜な男で、ノーネクタイなのさ』ということで、Unamuno を紹介してもらった。Unamuno はその当時からすでに、自分が Salamanca 大学の博学な教授と呼ばれるのを嫌っていた……。彼は例の反仏的な立場を強力に推し進めていた。そして疑いもなく彼は注目すべき、一風変わったバスク人だった。当時 Unamuno はまだ Sarmiento を知らなかった。そして、わずかな資料を基に、一種の軽蔑の念でもって、彼独特のユーモアを交えてアルゼンチンの文学を論じていた。』^⑥

それ以後、2人は前後5、6回会ったきりで、その他はすべて文通による交際だったと Unamuno は、例の「Darío との文通」の中で述べている。Unamuno は黄金色の土質の、古い Salamanca の町が好きだった。彼の詩集には、この静かな町をうたったものが幾つかある。Unamuno は止むを得ない事情がある他は、滅多にこの町を離れなかった。かって Darío に宛てた手紙の中で、Salamanca を、昔ばなしを沢山知っているおばあさんにたとえたこともあった。一方、Darío は、いわば放浪の詩人であり、浮草のように、各地を転々としていた。前後8回におよぶイスパニア訪問の合間を縫うようにして、Paris, New York, Roma へと旅したのである。このような事情からも、Unamuno と Darío が膝を交えて語り合う機会が少なかった理由が伺える。ただ、それだけの理由だけでは腑に落ちないのは、Darío も Unamuno も、言葉の上では互に親交を望みながらも、互に積極的に行動することのなかったことである。Darío は、かって Salamanca を訪れ、Unamuno に会いたいと書いたことがあった。Unamuno もそれを歓迎した。^⑦ しかし遂にそれは実現しなかったのである。Unamuno は Darío との交友関係の親密でなかった理由として、自分が duro で hosco に見えたからではなかろうかと、例の「Darío との文通」でいっている。一方、尨大な数に上る Unamuno の書翰のうち、Darío と交したものが僅か10通余りに過ぎないことも、あの *Cristalina muralla de hierro* といった Unamuno の言葉を裏書きするかのようである。現在までに判明している2人の文通は、1899年4月21日付のものを始めとして、1909年4月5日付のもので終わっている。^⑧ 両方とも Madrid から Unamuno 宛に書いたものである。Unamuno と Darío との個人的な交際は、すでに見たように、やや限られたものであった。しかしながら、1899年、Darío が2度目に訪西した年だけをとってみても、文化的な活動の場において、

特に新聞、雑誌などにおいて2人は互に紙面で顔合わせをすることがしばしばあった。Antonio Oliver Belmás は『このもう1人のルーベン・ダリオ』という著書の中で、「Darío は Salamanca 大学教授という身分に示される学者としての Unamuno と同時に、プロテスタント的な態度の万事批判的な見地から物を見る Unamuno に intimidación を感じ得なかったのではないか」⁹⁾ と、その間の事情を臆測している。

Madrid での Darío の文芸活動ははじめて彼がイスパニアにきた時とくらべて一層旺盛になっていた。米西戦争後の Madrid では、祖国の復興を目ざす政治的、文化的な活動が若い世代の人々によって興されていた。彼らは、いわゆる98年代の作家たちである。それと平行して、国家の存亡といったことには無関心な、純粋に美を求めた一部の詩人、作家たちがいた。彼らは、いわゆる modernistas たちで、Unamuno は前者、Darío は後者に属していた。当時刊行された文芸雑誌はかなりの数に上るが、いずれも、寿命は短かかった。そのような雑誌の中に、『新生』(*Vida Nueva*)、『新雑誌』(*Revista Nueva*)、『文学生活』(*La Vida Literaria*)、『イスパニア魂』(*Alma española*)、『ヘリオス』(*Helios*)、『マドリー・コミコ』(*Madrid Cómico*)、などがある。¹⁰⁾ はじめは、二つの傾向は判然と区別されていなかったが、次第にその性格を明らかにしてゆくことになる。このような場での Unamuno と Darío の活躍は盛んなものがあったから、これを通じて2人は互に、相手の思想的な立場ないし詩風などを知ることができた筈である。たとえば『新生』は、思想的な傾向の雑誌であるが、1899年4月号には、Darío の詩がのっているし、3月号には、Juan Ramón Jiménez の詩がのった。また、『新雑誌』は、文学的な傾向のもので、『新生』と同年に発刊されたが、執筆者の顔ぶれを見ると、Darío, Benavente, Baroja, Rueda, Unamuno, Maeztu などである。同じく1899年に発刊された『文学生活』にも、Benavente, Clarín, Palacio Valdés, Martínez Sierra などと共に、Darío, Unamuno が寄稿している。Darío の詩『イスニパアのシラノ』(*Sirano en España*) の雑誌に発表されたものである。Unamuno と Darío との不一致は、このような、98年代の作家たちの立場と、近代主義者の立場との相違としても充分考えられることではある。伝統を尚ぶイスニパアにおいて、近代主義は、いわば目の仇のような存在だったに過ぎない。当時、イスニパア切っただけの文芸批評家だった

Clarín は、Darío の詩を評してこういったものである。

Por Dios, Rubén Darío, usted, que es tan listo, y tan elegante... a la española, cuando quiere, déjese de esos *Galicismos internos*, que son los más perniciosos. ¿Para qué ese afán de ser extranjero? Cuando a usted se le ocurran diabluras retóricas, que no sean... de París, que sean... de Cantillana, donde ya sabe usted que también está el diablo.^⑩

Unamunoの態度も、基本的にはこれと同じだった。1899年4月、Grand-montagne の『ラ・マルドナーダ』 (*La Maldonada*) を評して、「われわれは、イスマノアメリカの作家たちが、『あらゆる光の中心』である Paris のまわりを飛びまわるのを止めて、彼ら自身のアメリカを見出してくれるまで、イスマノアメリカ人を見出すことはないだろう....もし彼らが注目されたいのなら、頭ででっち上げた官能性とか、**Barrio Latino** の蒼白な反射光をかかげてはならない。まず、魔術師であり巨大な隠喻使いの Victor Hugo への狂信、崇拜をかなぐり捨てる必要がある。」^⑪ といった。これは、まぎれもなく98年代の作家たちの立場である。と同時に、Unamuno の抱いているイスマノアメリカの文学乃至は文化に対する考え方の基本的な姿でもある。Unamuno と Darío との関係論を論ずる場合、この公的な立場、すなわち **Modernista** に対する **Noventaiochista** としての彼と同時に、人間 Unamuno としての姿を併せ検討する必要がある。また、イスマノアメリカの文学乃至は文化に対する Unamuno の考え方も、彼の、Darío 評価と関連して、見逃すことはできない。そこでこの3つの観点から、さらに詳しく考察してゆきたい。

Unamuno にとって、Daríoの詩が魅力に乏しいものであった理由は、まず、それが、いわゆる **afrancesado** であったことにある。Unamuno によれば、**modernistas** の詩は内的な貧困さをカバーするために徒らに技巧を弄した軽薄なものであった。たとえば、Darío の詩に見られる **rima** の豊富さや、白鳥、王女、ベルサイユ宮殿などの語に見られる形の上の美しさは、Unamuno にとって耐え難いものだった。彼は、詩は、内から外に向かうべきものであって、その逆ではないと信じた。したがって、ウルグァイの友人、Carlos Vaz Ferreira に宛てた手紙の中でもこういつている。「...それに劣らず明らかなのは、リズムというものは、詩想 (*pensa-*

miento poético) に呼応すべきだということです。そして、私の場合に例をとりますと、その詩想が厳しいもの (austero) であり、手ざわりのよくないもの (adusto) であるときは、詩の形もそうでなければなりません。ですから、私は rima を嫌います。理由は、それが余りにも sensual に思えるからです。それに、rima は、思想の外的連繫要素——rima generatrice——となっています。それは、外から内へ向かう詩を作る者にとっては都合のよいものです。たとえば Rubén Darío は、彼の詩の着想に関連性を与えるために rima を必要としています。彼の concepciones poéticas は往々にして万華鏡的であって、内的な繋りに欠けています。その糸が失なわれては、繋りのない断片的な印象になってしまい、文字通り、紐のない首輪となってしまおうでしょう。しかし、私にとって、rima は邪魔です。』^⑩

この文面からもわかる通り、Unamuno の詩と Darío のそれとには、基本的な態度の違いがあった。『俗なる続唱』(Prosas profanas) は近代主義の頂点に位するものであるだけに、Unamuno の風当りは特に強かった。耽美的で肉感的で、フランスの高踏派詩人たちの面影を多分に偲ばせるこの詩集は、どちらかといえば hirsuto な Unamuno の詩とは対照的である。

詩に対する Unamuno のこのような立場からすれば、Darío の如き詩人は「ローマの崩壊期に生まれた野蛮な作りごと (bárbaro artificio) を弄する者」に過ぎなかったのであろう。

Unamuno の詩のもう一つの特徴は情熱的であるということである。これは単なる恋愛感情にとどまらず、政治、社会、国家の情勢に対する思想的な深さと情熱とを意味する。1910年5月20日付で、チリーの友人 Ernesto A. Guzmán に宛てた次の手紙の中に、われわれはそれをはっきりと見ることができる。

「この政治、社会情勢は文学の中に反映されます。文学は闘いの中から作られるものなのです。純粋な芸術、純粋な詩というものには気力というものはありません。果してこれで良いものかどうか。芸術のための芸術とか、水仙だとか皇女だとか何だとか、そのような芸術には情熱 (pasión) がありません。Rubén Darío にとっても、もっと優れた詩人になるには、また、イスニパア語を話す世界の抒情の天才となるためには、愛国的な情

熱，政治的，宗教的情熱，どんな種類のものでもよい，**fanatismo** が足りなかったのです。社会人としての弱さが彼の詩人としての価値を損ったのです。彼の度の過ぎた **cosmopolitismo** が，彼をして一層 **universal** な人物たらしめることを妨げました。**Carducci**のあの驚くべき政治への情熱，イタリア統一に対する彼の **fanatismo**，彼の **Garibaldi** 崇拜，ハプスブルグ家やイギリスに対する憎悪，そうしたものが，彼に **universalidad** を与えたのです。また，**Dante** はフローレンスの政治への情熱に満ち溢れていました。祖国ニカラグアを感じ得ない **Darío** に，どうしてベルサイユが感じられたのでしょうか。もっとも，それにも拘らず彼がすぐれた詩人であることには変わりありません。]¹⁴

ただ，ここで注目すべきことは，**Unamuno** が，*Prosas profanas* 以後の **Darío** の詩集を読まなかったらしいことである。**Darío** の詩はこの時期を境として，次第に政治的な関心を高めるようになってきた。その何よりの見本が詩集『生命と希望のうた』(*Canto de vida y esperanza*)である。もし **Unamuno** が **Darío** の後期の詩を読んでいたとすれば，**Darío** に対する評価も変っていたかも知れないと思うのである。¹⁵ 「かも知れない」といったのは，**Unamuno** の **Darío** 評には，上記の詩人としての立場の相違以外の要素が考えられるからである。これについてはあとで述べるつもりである。**Guillermo Díaz-Plaja** は *Modernismo frente a Noventa y Ocho* の中で，**Petersen** の説を借りて98年代と近代主義との分類を行なった。¹⁶ 彼はこの二つの流れを生物学的に，空間的に，且つ時間的に分析した。それによると，98年代の特色は，男性的，能動的であり，**castellanismo** と **temporalidad** にある。そして，近代主義のそれは，女性的，受動的で，**mediterraneidad** と **instantaneidad** にある。**Unamuno** のいう **pasión** は，この分類によれば，男性的なものの象徴であるともいえる。

ところで，**Unamuno** ほどイスマノアメリカの文学に深い関心を抱いたイスマニア人は珍しいであろう。彼は豊富な語学力を用いて，ギリシア，ラテン文学など，いわゆる古典ものの他に，イタリア，フランス，ポルトガル，ドイツ，ロシアなどの文学に関する論文をかなり書いているが，中でも，イスマノアメリカに関するものは，ざっと数えただけでも，新聞，雑誌などに掲載されたものを含めると80篇以上ある。当時のイスマニアにおける中南米文学に対する認識の乏しさは想像以上だった。一般に新大陸

のものは大したことはないといった、誤った先入感に支配されていた。イスパニア人で、**Buenos Aires** に渡り、事業に成功したある男が、アルゼンチンをはじめ中南米の作家や思想家たちの作品を祖国の大学の図書館に寄贈したいと申し出たが、運賃をも負担するからといっても受取ってもらえなかったという、信じられないようなエピソードを、**Unamuno** は語っている。^⑩ そのようなとき、新しいアメリカの文化的なエネルギーを認め、旧大陸の人々に紹介した **Unamuno** の功績は大きい。**Unamuno** の父が、かつてメキシコに住んだことがあるが、その事も、彼の、中南米に対する関心を高めた要因の一つと考えられる。中南米の作家たちは、とりわけ十九世紀の初期以降、旧大陸、特に **París** にあこがれた。**Unamuno** も、1924年における国外追放から、約7年間、**París** に住んだが、その間に大勢の中南米の作家や詩人たちに会っている。内的なものの充実から外的なものに向かう彼にとって、イスパノアメリカ人の態度、特に **París** 詣での人々に空虚さを感じた。**Unamuno** は、彼らが、新しい大陸にある自分自身のものに、根ざすべきであると主張する。そこにイスパノアメリカの文学の **originalidad** を見出すべきであると彼は考えるのである。このような彼の考えは、**José Hernández, Hidalgo, Ascasubi, Estanislao del Campo** らの作品によって代表されるガウチョ文学、特に *Martín Fierro* の礼讃となって現われる。*(Martín Fierro es lo más homérico que conozco en la literatura hispanoamericana...)*^⑪ 彼はこの作品の中に、最もイスパニア的な精神を見出している。そして、そこにイスパノアメリカの文学は **originalidad** をもち、価値を有するのだと **Unamuno** は考えた。1907年、ウルグアイの友人 **Nin y Frías** 氏に宛てた手紙でも、この詩が **Hugo** や **Quintana**, そして **Heredia, Leconte de Lisle, Verlaine** などの追従者たちによるいかなる作品よりも偉大である旨を述べた。**Unamuno** によれば、**París** は何も、中南米の人々にヨーロッパの精神を覚えてもらう必要を感じないわけで、^⑫ だから、中南米の文学は独自のものを開拓して行けばよいのであった。端的に言って、フランス文学は独立間もない中南米の文学にとって有害なものだと **Unamuno** は考えた。ただ、このような彼の態度が、余り卒直に表わされた結果、少なからぬ誤解を招いたことも事実である。たとえば、**Grandmontagne** の *La Maldonada* に関する **Unamuno** の批評は、イスパノアメリカの作家たちを十分に理解しないものとして、反

論された。1899年、4月16日発行の雑誌『新生』[にのった Darío の *Las letras hispanoamericanas* がそれである。Darío は余程 Unamuno の論文が気になったと見えて、1912年に出た『自叙伝』(*Autobiografía*)の中でも、この時のことを想起している。「文芸上のデカダン主義がわれわれの間にはびこった天災であるというのは間違っている。しかし、Unamuno 氏が大変心配している París とは緊密、かつ親密な関係を保っている。われわれの新聞の大部分はフランス人の書いたものである。Daudet や Zola の近作は París で発表されるのと同時に *La Nación* 紙にも発表された。……(中略)……また、われわれは旅行が好きだし、可能でもあるので、París はわれわれの頻繁な訪問を受入れ、みごとに金をまき上げてくれる。ところで、われわれは勤勉な国民だが、たまには、小グループの人々が、Emerson なら *whim* といいそうな彼らの気まぐれのガラスを通して、美しさを崇めることもあり得る。Unamuno 氏に信じてもらいたいのは、たとえば私の *Prosas profanas* は、Ramos Mejial de Coni の科学的な文学、あるいは J. V. González の地方色のある作品を些かも損うものではないし、また、われわれの偉大な Leopoldo Lugones の *Montañas de oro* は、Leguizamón またはその他の、この種のもの愛好者たちの *criollo* 的な労作を妨げるものではないということである。』²⁰

この時期から、イスマノアメリカ文学に関する Unamuno と Darío との論争は活発になる。Unamuno は、上記の論文に対する反論を Buenos Aires の *La Nación* 紙に発表した。「私はイスマノアメリカの作家や詩人たちに、何もガウチョについてのみ書けといているのではない。*estanciero* たちの努力ぶりだとか植民者の労働、内乱、産業の発展、その他アメリカにおける人々の生活を構成するすべてについて書いて欲しいといているのであって、フランス語から翻訳した犯罪ものなどは欲しくないといったまでだ。イスマノアメリカにおける *decadentismo* は *incipientismo* に過ぎない。』²¹ このような言葉のやりとりにおいて見られるのは、Unamuno が常に批判的な立場に立ち、Darío はもっぱら弁護する立場にまわっていることである。Darío はいかにして Unamuno に自分たちの文化的活動を認めてもらおうかと苦悩している。このことは、数少ない手紙の中にも見ることができるのである。1899年4月21日付の Darío の手紙はこう述べている。

「方法や手段は違っていても、私たちの考えは合致するものと思います。イspanoアメリカの思想や文学について、もちろん私は『彼の地には何も無い』と思います。と申しますか、極めて少ししかないと言い代えたい気持ちです。しかしながら、その僅かばかりのものは尊敬するに足るものだと思うのです。その『あるもの』(lo que hay)が、こちら〔注：イspana〕では知られていないのです。こちらで知られているのは滑稽で、ぶよぶよしたものばかりです。しかし、僅かながらも、価値のある中核が確かに存在しているのです。……」²²

イspanoアメリカの文学がParisに傾倒することに対してUnamunoは、指導者的な立場から、それが好ましくない現象だと決めつけたことはすでに見た。そしてまた、その理由も、originalidadの欠如を憂うがためであると述べた。ところで、その理由の補足的なものと考えられるのが、1899年5月19日付でSalamancaから出したDarío宛の手紙の中に伺える。

「告白しますが、私はParisに些かも魅力を感じません。私にはLondresよりも、あるいはBerlínよりも輝きのある(luminosa)都市とは思えないのです。一般的に言って、私にはフランス的なものは余りしっくりとこないのです。ドイツ語を最初学び、次に英語を学んでからというもの——それも、もう何年も前のことですが——フランス語では少ししか読んでいません。いつの日か、フランス的なもの、さらにはラテン的なものに対する私の反感——それは私の気質からくるものですが——もおさまることでしょう。フランス語で書かれた文学ではMaeterlink(*Le trésor des humbles*における)のようなベルギー人とか、Amielのような、スイス人が好きです。私はParisの上品さや優雅さといったものに反発を感じるのです。これはきっと私の至らなさによるものですが……。」²³

Guillermo Díaz-Plajaもいっているように、²⁴ Unamunoはrenovaciónと名のつく一切のものに対して関心を持っていないということではなくて、「若者はいても青春がない」ことを歎いているのは事実である。

イspanoアメリカの文学に関連して、Unamunoはしばしば鋒先をDaríoに向けた。それはDaríoがその代表的な存在であったためだけでなく、体質的な、一種の反発感があったことによるものと考えられる。Unamunoには、無意識の中に、彼の方から鉄の壁を作り上げていたと考えられるふしがある。多くのイspanoアメリカの作家たちがParisへ行ったが、もち

ろん彼らは、才能の点で千差万別であった。だから、必ずしもすべての人が高く評価されるとは限らない。Clarín は、このような人々のことを *los sinsontes azules de la América Latina* といって軽べつした。南米渡来の物まね鳥だといったのである。Darío は、ラテン・アメリカ人の1人として、これを憂えた。しかし、彼が最も心配したことは、París が、こうした作家たちを無分別に一束からげにして評価する傾向にあったことである。Darío は、価値のない作家たちが認められないのは当然としても、真に価値ある者までが同様の扱いをうけるのは不公平であると主張し、かってこれを公けにしたことがあった。ところが、Unamuno はこれを読み、*El Imparcial* 紙上で、『公開状』と題してこういった。

Hace poco leyendo unas quejas de Rubén Darío, porque París no hace caso a los literatos hispanoamericanos confundiéndolos con los rastaqueours, me dije que tienen razón en París.²⁵

そして、フランスのデカダンスの真似ごとをもってゆく代りに、*Martín Fierro* や *Santos Vega* の中に脈動するものをもって行けば注目されるだろうとつけ加えた。

ここには明らかに Unamuno の誤解があった。中南米の作家たちに関する彼の印象は、それなりに意義があるにしても、そこに引用した「Darío の言葉」は、実は Darío のものではなかったのである。もちろん、Unamuno は後日これを訂正せねばならなかった。同年7月8日、Buenos Aires の *El Sol* 紙にのった『釈明』²⁶ は Darío の指摘によるものであった。彼はその冒頭で、“No solo no me gusta ser injusto sino que aspiro a no dar ocasión siquiera a que lo sean los demás”. といった。他人に対して不公平でありたくないと同時に、自分に対しても、他人が不公平であって欲しくない、というのだが、Darío に関する限り、彼の態度は果してどうであったろうか。甚だ疑問に思われるのである。Darío はあらゆる機会を利用して、この Salamanca 大学教授に自分の立場を理解してもらおうとした。1899年5月21日付の彼の手紙も、その良い例である。

「アメリカの青年の大多数には運悪しくももたらされた輸入ものの París への心酔のきざしが伺われますが、私が、それとどんなに戦ったか、あなたはご存じありません。かって、私は *Prosas profanas* の序文で、その詩集が私の *individualidad* と *educación literaria* の成果であると述べまし

たが、それを手本に、あるいは案内書とされては困ると、これまでいってきました。私は数カ国語を存じていますし、かつてはあらゆる文学に手をつけようともしました。しかし、フランスの文学が最も力強く私を引きつけたのです。今日、思考する世界のすべてがそうでありますように、アメリカが **París** からくる光に向かう傾向をもっているのは、よくわかるような気がいたします。以前は、その焦点は **Atena** でした。私にとっては、それが **New York** であろうと、**Buenos Aires** であろうと一寸も構わないのです。それは時代のなせる業です。われらの母なる祖国の精神的な貧困さは、われわれの目をそこから外らしめたのです。これは私たちの罪ではありません。新しく力強い何かが生まれた時、私たちは何のちゅうちょもなくそれを頭におしいただきます。たとえば、いま、アメリカにあなたや **Rusiñor** が抬頭しつつあるのをご覧下さい。その度合いは別として、私たちの文化は **cosmopolita** ですし、また、そうあるべきです。……」²⁷

しかし、Unamuno の批判は鋭かった。Darío は **lo parisiense** と **lo cosmopolita** とを混同していると指摘し、また、些か個人的な事柄におよんで、「語学力の点なら、私は古典ギリシア語を知っている。Darío はかつて私に **Platón** や **Homero**, **Píndaro** などを原語で読めるようになるにはどの位の時間かかるかと聞いたことがある。」²⁸ などと行って得意になることもあった。1908年の3月、アルゼンチンの友人 **Ricardo Rojas** に宛てた手紙にも、Unamuno の Darío の詩に対する否定的な立場は変わっていないことがわかる。

「お便りの中で、**Rubén Darío** のことをいっておられますが、いずれ、お会いした折、お話しいたしましょう。ニカラグア人のあの技巧に凝った変り種の中に (**las caramilladas artificiosas**) 果して詩があるかどうか、私がお話を聞いて納得できますかどうか。他のことはいざ知らず、彼の詩 (**versos**) は、私にとって、その根底にあるものが恐ろしく散文的で、情熱もなければ感激もなく、単なる **virtuosidades** といじり屋的なものにすぎないとしか思えないのです。」²⁹

以上、主として Unamuno の側から見た Darío について述べてきた。では、Darío は、Unamuno に対してどのような態度だったろうか。一言にしていえば、終始好意的であった。謙虚だったといってもよい。**Luis Alberto Sánchez** が **grescas** と呼んだ、例の、2人の中の気まずい関係、³⁰

それは1907年のことだったが、Unamuno の激しい個人攻撃に会った時にも、Darío は、平静さを失なわなかった。Unamuno は、「Darío にはチョロテガ族インディアンの血がまじっており、彼の帽子の下にはインディアンの羽根がある。」と不用意にも友人にもらしたのである。このことを人伝に聞きおよんでから間もなく、Darío は Paris から Unamuno に宛てて手紙を書いた（同年9月5日）。その内容にはわれわれの心を打つものがある。よほど激しい口調のものだろうと想像するむきもあるだろうが、事実は逆であった。われわれは、この手紙の中で、Darío の切実な願いを知る。

パリ，1907年9月5日
コルネーユ通り，3

拝啓

先ず例のお言葉についてですが、小生が帽子の下から取って書いているのは1本の pluma 「羽根」と「ペン」の両方の意味がある]です。それよりも貴兄の新刊の著作を拝見していないのが何よりも残念です。貴兄と小生との間に、精神的な (mentales) 相違はあるかも知れません。しかし、小生は貴兄の中に——特に最近の貴兄の作品を読んだあとでは——今日イスペインにではなくて世界に存在する精神的な力 (fuerzas mentales) の1つを認めずにはいませんでした。

同時に、小生も貴兄の側から、文化に対する小生の努力に対して何らかの好意あるお言葉をいただきたいものです。小生は、貴兄が貴兄の人生におけるいかなる時にも真剣に受け入れられたなどとは決していわないでしょう。なぜなら、国家において指導者たるべく生まれた人々というものは、いかんながら、何時の世にももっと真剣なもの、つまり周囲の生活の影響の犠牲者なのですから。それから、小生は貴兄の中に詩人を見た少数の人々の1人です。人々が貴兄を博識で教授であると考えていることは不思議ではありません。大学人としての貴兄の御活躍がその名声を裏づけています。そして、学問の割合が多いのは、決して軽蔑すべきではありません。しかし、そのような人間の中に詩人としての才能を見る人は詩人以外に誰がいるでしょうか。で、小生に関して申しますと、小生のような献身も、何らかの評価に値すると思います。

貴兄の中にある孤高さと厳しさからして、貴兄が正義を愛することので

きる人であることがわかります。地味に家庭の幸福にひたっておられる貴兄は、そのような利点を持ち合わさない人々のことも考えるべきです。

貴兄は人を導く人物です。永遠で決定的なことがらに関する貴兄の関心は、貴兄に正義と善意を求めています。どうか、公正で親切であって下さい。

敬 具

ルーベン・ダリオ

例のインディアンの羽根の話が意外に早く **París** の **Darío** の耳に入ったことに **Unamuno** は驚いたことだろう。同年同月26日付で、**Unamuno** は、それが単なる誰かの作り話にすぎないといい逃れた。しかし、公正で親切であって欲しいという **Darío** の訴えは、貴重な教訓として彼の心に残った。事実、**Darío** の言葉にもある通り、**Unamuno** の中に新しい才能のあることを認めたのは、他ならぬ **Darío** だったのである。**Unamuno** の『詩集』(**Poesías**)が出たのは1907年のことで、彼が43才の年だった。360 ページにわたるこの詩集は1884年頃からの作品をまとめたものである。この当時の批評は極めて消極的で、**Unamuno** をうんざりさせたものである。**Unamuno** は習慣として何か新しい作品を書くときは前もって知人や友人にその内容や要領について予告した。この詩集の場合も例外ではなかった。彼はでき上がった作品を彼ら友人に贈って批評を求めた。しかし、これまでの **Unamuno** の哲学的内容のものの場合と違って、期待していたような返事はごくわずかしかこなかったのである。彼の詩は難解で、とっつきにくいというのが一般の批評だった。**Cataluña** の大詩人である **Maragall** も、彼の詩に対して **comprensión** も **generosidad** も抱き得なかった。これを気にした **Unamuno** は、かって **Azorín** に宛てた手紙の中でこういった。「野蛮な奴どもの大部分は、学者で思想家で、著名な大学教授である男が、今度は詩人ぶろうとしている、とってギャーギャーいっていますが、私は誰にも分類されるのは嫌です。」^⑩ また、**Maragall** に出した手紙には「私は詩集を出しましたが、批評はどういうのでしょうか。しかし、どうでもいいんです。どうせ、**Madrid** の批評というのは、いつもの外れなんですから。」^⑪ このようなとき、**Valladolid** に住む彼の友人 **Jiménez Ilundáin** が、「あなたの詩は極めて独特で、あなたの心を最もよく表わしています。」と

いったときの喜びようは一しおだった。「親愛なる Jiménez 君，お手紙
どうも有難う。小生も同様に，『詩集』が，小生がこれまでに作ったもの
の中で最も私のもの (lo más mío) であると思います。で，なるほどイ
スパニアでは不信と疑惑でもって迎えられはしましたが，外国やアメリカ
では順調にいらっています。』³²

Darío が La Nación 紙に『イスパニアの横顔』(Semblanzas españolas) の中で Unamuno を取上げ，『詩人，ウナムノ』(Unamuno, Poeta) と題して紹介したのは1909年のことである。彼は，Unamuno は何であるよりも先ず詩人であるといった。³³ (Sí, poeta es asomarse a las puertas del misterio y volver de él con una vislumbre de lo desconocido en los ojos. Y pocos como ese vasco meten su alma en lo más hondo del corazón de la vida y de la muerte.) Unamuno が逆説 (paradoja) の愛好者で，自分も何度かその犠牲になったことがあると認めながらも，彼が uno de los más notables removedores de ideas que hay hoy であると同時に un poeta であると Darío は述べている。そして，Unamuno の詩に一種の堅さ (rigidez) があり，また，作詩上の妙技といったもの (virtuosidad) に欠けてはいるが，その方が精神的に (mentalmente) 好きであるといった。すべての鳥が同じ鳴き声でないように，また，すべての花の形や香りが同じではないように，人々はすべて個性をもっている。Unamuno の詩には rigidez があるが，それは彼の個性を表わしてよるしい。Unamuno は，形を重要視しない。もしそれが可能なら，Unamuno は，地下を流れる泉のせせらぎのように，外から聞けない心の中の音楽のみをうたうことだろう。³⁴ Darío は Unamuno の詩に対する深い理解があった。今日，内外の Unamuno 研究家たちが，彼の作品のすべてを貫くものが詩人の心であると指摘していることを思うとき，³⁵ その直観力の鋭さに驚かされる。

ところで，『ルーベン・ダリオとの文通』が La Nación 紙にのったのは，すでに見た通り1916年5月10日だったが，Unamuno は，それより先に，雑誌 Summa に，Darío をしのぶもう一つの随筆を書いた。³⁶ 多少長いので，要点と思われる箇所のみを紹介すると，

「Verlaine のことを『気の毒なルリアン』(Paubre Lelian) と人はいったが，Rubén はそれを覚えていた。気の毒なルーベン！ 私はいま，そう

いいたい。なぜなら、この『大きな子供』もまた、Verlaineのように、真底から善良な人だったからだ。彼は弱々しかった。全く弱々しかった。自分自身をどうすることもできなかった。彼は神秘を恐れ、揺籃のそばに永遠の憩いを求めつつ、二つの世界をさまよった。あらゆる国の人であり、しかも祖国はこの世ではなかった彼！

私は Rubén と個人的なつき合いがあった。しかし十分なものだったとはいえない。」

Unamuno は1907年9月5日付の Darío の手紙を紹介して感想をのべる。

「何という立派な、気高い気持で、彼は私の態度を歎いたことだろう。私は彼に対してあのように振舞うべきではなかった！」

「あれから8年以上経った。思えば気の毒なことをした。Rubén の高貴な、涙ながらの叱責の言葉は幾度も私の心の深底にこだました。そしていまなお、まだ軟かい土の下から湧き出てくるような気がする。私は彼に対して公正だったろうか。そうだったとはどうしてもいえない。」

「彼の望みはもっともであり、崇高なものだった。しかし私は自分の畑のみを耕し、私の『すばらしき隔離』(espléndido aislamiento) を信じた人間を軽んじ、新たなる軽侮を考え、彼の作品を前に、沈黙をつづけた。これは公正で親切なことだったろうか。そうだとはいえない。」

人間としての Darío の偉大さを讃えた後、Unamunoは、Darío の詩人としての評価におよぶ。

「彼の心にあった永遠でしかも最も内的な不安が、彼を悩ませていた。そしてその不安が彼に、最も深い、最も内的な、そして最良の詩を作らしめた……。Darío は悲しいことに、最も自分のものらしくないもの、ないしは最も弛緩したものの方が先に世に知られるという不運な人だった。

「私は Rubén に対して公正でもなければ親切でもなかった。私は公正じやなかった！……。その悪徳ぶりについてあんなに語られ、それ以上に、とかく空想されたあの男、実は親切な、根っから親切な人だった。そして、謙虚だった。」

「愛を渴望する彼の、あの哀れな心は決して休むことを知らなかった。その愛は能動的な愛ではなくて、受動的なものだった。」

「彼ほどわれわれの心にひびく人物は誰もいなかったし、詩に対する理解を彼ほど鋭敏にさせてくれた人も少ない。彼のうたは、われわれにとっ

て、新しい地平線だった。目に見える地平線ではなく、耳で聞く地平線である。」

「気の毒な **Rubén!** 不公平でも悪くもありません。君の友の、この言葉は、君にとって遅すぎただろうか。親切な言葉に遅すぎることもある筈はない。君の生前、なぜ私はあんなに沈黙したのだろうか。私にはわからない。わからない。いや、私は、その理由を知りたくないのだ。」

「もし神が私に健康と時間と力とを与え給うなら、私は、君の作品について——その理由は考えないで欲しい——君がこれまでに聞いた筈だった言葉、私がいわなかった言葉をいいたい。私の言葉が聞えますか。聞えていると信じたい。 **Rubén,** 公正で親切であるべきですとも。」

この原稿がまだ発表されていない時、彼は友人 **Francisco de Cossío** に手紙を書いたが、その中で、**Unamuno** は **Darío** に対して如何に軽侮の念を抱いていたかを打ち明け、歳月の移り変りと人の心の変化に感歎している。(Acabo de hacer para *Summa* y realmente conmovido una cosa en recuerdo del pobre **Rubén,** con quien fui, en su vida, desdeñoso en extremo. ¡Cómo ablandan los años el corazón!)

Darío の夭折を境として **Unamuno** の彼に対する態度は一変した。これをしも、**Unamuno** の *paradoja* というのであろうか。否、そうは考えたくない。確かに、『年月の経過が彼の心をやわらげた』ことは考えられる。人間、誰しも老の坂にさしかかると、善行ないしは善意の持つ意味を一層深く味わうことであろう。**Unamuno** の場合、**Darío** の死に接して、強烈な自己反省を行なったことは明らかである。彼も人並みにいろいろな煩惱をもっていた。**Don Quijote** のように、自己の名声を時間と空間に永遠に留めたい野心があった。むしろ、これが **Unamuno** のすべての行動の原動力であったのである。そのために、ややもすると、自己中心になり勝ちだった。自己に不利益をもたらすものを排除しようと努めるのは、善悪の判断は別として、人間につきものである。要はそれをどの程度にまでおよぼすかである。**Unamuno** は恐らく、この随筆の内容が、生前の **Darío** に対するものと余りにも違っているために、世間の疑惑や、厳しい批判を受けるであろうことを予期していたに違いない。しかし、敢えてそれを行い、卒直に反省しているところに、彼の人間としての立派さがあると考えたい。『公正で親切であるべきです、**Rubén!**』(¡Hay que ser justo y bueno,

Rubén!) という見出しは、Darío がかって Unamuno に求めた言葉だった。いまや、Unamuno は、これを他ならぬ自分自身に向けていったのである。

(注)

- ① Guillermo Díaz-Plaja : *Modernismo frente a Noventa y Ocho*, Espasa-Calpe, Madrid, 1951, (p. 155) による。
- ② *Obras completas de Unamuno*, Afrodisio Aguado, Madrid, 1958, tomo VIII, p. 531
- ③ Antonio Oliver Belmás : *La geografía creadora en Rubén Darío*, (雑誌 *El libro español*, octubre 1966. p. 634) イスパニアにおける Darío の文芸活動や交友関係が手際よく書かれている。
- ④ *Obras completas de Rubén Darío*, Afrodisio Aguado, Madrid, 1950, tomo III, p. 40
- ⑤ Miguel de Unamuno : *La España de hoy, vista por Rubén Darío*. (O. C. de Unamuno, tomo VIII. p. 122)
- ⑥ *Obras completas de Rubén Darío*, Afrodisio Aguado, Madrid, 1950, tomo I. p. 145
- ⑦ Miguel de Unamuno : *De la correspondencia de Rubén Darío* (O. C. de Unamuno, tomo VIII. p. 533)
- ⑧ Manuel García Blanco : *América y Unamuno*, Ed. Gredos, Madrid, 1964. pp. 53~74. (*Rubén Darío y Unamuno*).
- ⑨ Antonio Oliver Belmás : *Este otro Rubén Darío*, Ed. Aedos, Barcelona, p. 156
- ⑩ Guillermo Díaz-Plaja : *Modernismo frente a Noventa y Ocho*, p. 20~45
- ⑪ *Madrid Cómico*, 14 de abril de 1900, p. 222 (*Op. Cit.* p. 48)
- ⑫ Miguel de Unamuno : *La Maldonada*, *La Época*, Madrid, 1899 年 4 月 10 日 (O. C. de Unamuno, tomo VIII, p. 64)
- ⑬ Manuel García Blanco : *Miguel de Unamuno y sus poesías*, *Acta salmanticensis de la Universidad de Salamanca*, 1954. p. 120
- ⑭ *Boletín del Instituto Nacional, Santiago de Chile, año XIV, núm. 35, 1949.* 中の《*Cartas de Unamuno*》 p. 13
- ⑮ 実際 Darío はこの詩集を Unamuno に贈ったのではあったが……。献辞に《*Cantos de vida y esperanza. Con un saludo afectuoso, desde la orilla del Cantábrico, Rubén Darío, San Esteban de Pravia, Julio 23, 1905*》と書かれている。Biblioteca Unamuno, Salamanca. (Antonio Oliver 氏の *Este otro Rubén Darío* による。)

- ①⑥ *Op. Cit.* p. 199~217
- ①⑦ *Obras Completas de Unamuno*, tomo VIII, p. 539~540 Unamuno はその理由として、イスパニア人の不信感を挙げている。(Y es que hay desconfianza, mucha desconfianza. ¡Se les ha dado tantas veces gato por liebre!) そして、その責任の一つは、イスパノアメリカの誇張主義 (hiperbolismo) にあるといっている。
- ①⑧ Miguel de Unamuno : *La literatura gauchesca, La Ilustración Española y Americana*, Madrid, 22-VII-1899. (*O. C. de U.* : tomo VIII. p. 90)
- ①⑨ *Carta abierta.* (*O. C. de U.*, tomo VIII, p. 72)
- ②⑩ *Obras completas de Rubén Darío*, tomo I, p. 145~146
- ②⑪ *Sobre la literatura hispanoamericana.* (*O. C. de U.*, tomo VIII. p. 76) 1899年5月19日付の *La Nación* 紙に掲載されたもの。
- ②⑫ *O. C. de Unamuno*, tomo VIII, p. 533
- ②⑬ Guillermo Díaz-Plaja : *Modernismo frente a Noventa y Ocho*, p. 156
- ②⑭ *Op. Cit.* p. 157. “He aquí la palabra terrible : no hay juventud. Habrá jóvenes, pero jnventnd falta.”
- ②⑮ *O. C. de Unamuno*, tomo VIII, p. 72
- ②⑯ *Op. Cit.* p. 84
- ②⑰ *Op. Cit.* p. 536
- ②⑱ Ricardo Rojas : *Retablo español*, Buenos Aires, Losada, s. f. p. 330~331
- ②⑲ Manuel García Blanco : *Rubén Darío y Unamuno*, p. 60~61
- ③⑩ 部分的に, Manuel García Blanco : *Don Miguel de Unamuno y sus poesías*, p. 114
- ③⑪ *Op. Cit.* p. 114
- ③⑫ Hernán Benítez : *El drama religioso de Unamuno.* Buenos Aires, Universidad de Buenos Aires 1949. p. 417
- ③⑬ *O. C. de Rubén Darío*, tomo II, p. 787
- ③⑭ *Op. Cit.* p. 791
- ③⑮ 代表的なものとして Julián Marías の *Miguel de Unamuno* を挙げる事ができる。
- ③⑯ ¡*Hay que ser justo y bueno, Rubén!*, *Summa*, año II, No. 11. Madrid, 15-III-1916 (*O. C. de U.* p. 518~523)
- ③⑰ Salamanca にて 1916年2月15日付の手紙。(M. García Blanco : *Miguel de Unamuno y sus poesías*, p. 45)